

第7回平和市長会議総会 全体会議Ⅰ

市民と都市が国を動かす

—世界的なパラダイムシフトを目指して—

2009年8月8日(土) 16:30~18:00
長崎ブリックホール国際会議場

チェアパーソン	ロバート・ハーヴェイ (ワイタケレ市長・ニュージーランド)
発 言 者	ドナルド・L・プラスケリック (アクロン市長・アメリカ)
	イヴァン・クネッツ (ピオグラード・ナ・モル市長・クロアチア)
	ステファン・ヴァイル (ハノーバー市長・ドイツ)
	ミシェル・シボ (マラコフ市事務総長・フランス)
	北橋健治 (北九州市長)
	中川智子 (宝塚市長)
	スザンナ・アゴスティーニ (フィレンツェ市議会議員・イタリア)
	キダー・カリーム (ハラブジャ市長・イラク)
	ジョージ・レーガン (英国・アイルランド非核自治体協会会長・イギリス)

開会

司会：それでは、ただいまから全体会議Ⅰを開催します。

この会議の議長を紹介させていただきます。ニュージーランドのワイタケレ市のロバート・ハーヴェイ市長です。

それでは、ハーヴェイ市長、よろしく願いいたします。

全体会議Ⅰ

ロバート・ハーヴェイ（ワイタケレ市長・ニュージーランド）：

私は、ワイタケレ市の市長をしております。今日は、全体会議Ⅰのセッションによるこそお出で下さいました。全体会議Ⅰは1時間しかないのです、議長にとっては悪夢です。でも、話がしたいとおっしゃる皆様の発言をできるだけ1時間に詰め込みたいと思います。

私は、17年間、ワイタケレ市の市長をしておりますが、平和活動家は50年間しております。1950年、初めての反核のデモが、私の生まれたニュージーランドのオークランドで行われた時に参加しました。その後の人生をずっと平和活動家として、核兵器反対・核戦争反対の運動を行ってきました。

1992年に市長になり、ワイタケレ市は平和都市宣言をしました。そして、デビッド・ロンギ首相の時、1994年にニュージーランドは非核地帯宣言をしましたが、これは当時は考えられないことでした。また、フランスの核実験に反対して、ポリネシアの環礁のほうにも行きました。ですから、太平洋諸島とも随分関わりを持って、核兵器に対するキャンペーンを行ってきました。

私は、ニュージーランドのジョン・キー首相のご挨拶を携えて、ここに参りました。また、我が国の軍縮大臣からのメッセージも秋葉市長にお渡ししました。つまり、ニュージーランド国家全体が本当に強い姿勢で非核地帯になろうとしているのです。われわれは、原子力を動力とする船舶、つまり原子力船の寄港さえ許さないという30年の実績があり、とても誇りに思っています。

ニュージーランドには8つの主な市がありますが、その全ての市長が平和市長会議のメンバーです。

今日は、ここに16人の発言者が登録されています。皆様を歓迎したいと思います。

参加都市の発言

ロバート・ハーヴェイ（ワイタケレ市長・ニュージーランド）：

最初に、アクロンのドナルド・L・プラスケリック市長にご発言をお願いいたします。

ドナルド・L・プラスケリック（アクロン市長・アメリカ）

皆様、こんにちは。私は、今回、このイベントを主催して下さった田上市長に感謝申し

上げます。この重要な長崎という都市で開催して下さい、今日、皆様にお話しする機会をいただいたことを光栄に思います。私は、長い間貢献して下さいった秋葉市長、そして田上市長に全米市長会議からのご挨拶をお届けいたします。われわれの市がより安全になるように、核兵器の威力から解放されるようにご尽力いただき、全米市長会議もそのために努力してきました。核軍縮、核不拡散、核のない世界を2020年までに達成したいと考えて努力してきました。同時に、われわれの限られた資金を武器から平和利用に回すべきだということを書いてきました。例えば、住宅問題、貧困の問題など、その他重要な問題が都市にはたくさんありますので、そちらにお金を回したいということです。

全米市長会議は、二大政党及び無所属の市長から成り、市民にとって重要なサービスを提供することに一番の焦点を置いています。

個人的なことですが、秋葉市長にはお分かりいただけるかと思いますが、私は、日本にやって来て国のために謝罪や弁護をしなくて済むことを本当にうれしく思います。秋葉市長が我が国の新たな大統領の名前を世界の市民にとって利益になる取組の一つに使っていることを非常に誇りに思い感謝申し上げます。

全米市長会議は、市民3万人以上の市の集まりです。私は、2004～2005年に会長を務めました。6月の年次総会で、われわれが審議している基本的な問題に関して決議をしています。核軍縮に関しても決議しています。1984年の全米市長会議では、核兵器による脅威を削減することを宣言し、広島、長崎の被爆40周年の85年にも同様の宣言をしています。1987年には核実験の中止を求め、2004年には、大量破壊兵器は文明社会にあるべきものではないと決議しています。2008年には、2020年までに全ての核を廃絶すべきであると言っています。われわれは、オバマ大統領にこの呼び掛けを2010年NPT再検討会議で発表するよう要請しています。

また、「2020ビジョン」で示された2020年を目標年次として核のない世界を築くように、核不拡散・核軍縮に関する国際委員会(ICNND)にも提議しています。秋葉市長が全米市長会議に来て下さり、その決議を全会一致で採択した時に同席して下さいったことをうれしく思っています。

ここで、全米市長会議の長年にわたる功労者を皆様にご紹介します。トム・コ克蘭氏は、全米市長会議の事務局長として、素晴らしいリーダーシップを発揮して、長年、核軍縮の政策を強力に推し進めております。

トム・コ克蘭さん、お立ちいただけますか。あちらにおります。

それから、秋葉市長のリーダーシップについてコメントしたいと思います。色々お書きになったものや演説などを通して、核廃絶は道義的な責任であると意義づけ、私を含め、アメリカの市長に大きな動機づけを下さいました。

広島と長崎のメッセージをわれわれの記憶から消し去ってはいけないと思います。そして、将来の希望も消し去ってはいけません。全米市長会議では、われわれのビジョンや理念、核のない世界をつくろうというコミットメントを再確認して、平和市長会議とともに、

夢と希望が現実となるように全力を尽くしていきたいと考えています。

ありがとうございました。(拍手)

ロバート・ハーヴェイ (ワイタケレ市長・ニュージーランド) :

プラスケリック市長、ありがとうございました。オバマ統領の素晴らしい政策が続くようアメリカに神のお恵みをお祈り致します。

全体会議 I は、「市民と都市が国を動かすー世界的なパラダイムシフトを目指してー」というテーマになっています。

ビオグラード・ナ・モル市のイヴァン・クネツ市長、お願いいたします。

イヴァン・クネツ (ビオグラード・ナ・モル市長 ・クロアチア)

(クネツ市長の通訳) ご参会の皆様、ビオグラード・ナ・モル市長、イヴァン・クネツの代わりにお話しさせていただきます。

まずは、長崎市の田上市長、素晴らしいお迎えをいただき、ありがとうございます。私は初めてですが、総会にこのような形で参加できたということ、また、2008年に平和市長会議に加盟できたこと、公式に役員都市として指名されたことを光栄に思っています。

広島、長崎に来たのは、核が日本で使われた結果、どんな最悪な状況になったのかということを知るためです。ビオグラード・ナ・モル市も近年戦争を経験しており、われわれは子どもたちに折り鶴の折り方を教え、「サダコさん」(佐々木禎子)がどのように苦しまれて亡くなられたかというストーリーを子どもたちに教えています。平和のメッセージを伝え、世界平和のための軍縮の必要性を訴えています。

500以上あるクロアチアの全自治体に「ヒロシマ・ナガサキ議定書」を送り、われわれは、国内で核兵器廃絶のために活動している平和市長会議を紹介してきました。国民全体に周知できることを願っています。加盟申請紙も添付し、少なからぬ数の自治体がこれに署名し、平和市長会議に加盟してくれました。現在、クロアチアには28の加盟都市があります。9月21日の国際平和デーに、再び同じような活動を実施する予定です。

人々は、核兵器というものと、それがもたらす結果を分かっていません。残念なことに、このことを分かっているのは、日本の皆様のように、「結果」を体験した人たちだけです。この問題は、この不況の時代において、一般の人々にとっては対岸の火事であり、実感をもって感じられるものではありません。人々は生活に追われ、それが直接的な脅威になるまで、非核化について考える余裕はないのです。

しかし、それでは遅すぎるのです。われわれ平和市長会議もそれを未然に防がなくてはなりません。われわれは、その組織の一員として、この地球のどこかに核兵器がある限り脅威は常に存在するという事実を、人々に認識させなければなりません。

小さな地方自治体の一つとして、今後もわれわれはこの問題について、できるだけ声高に訴えていきたいと思っております。この名誉ある平和市長会議に加盟するクロアチアの自治体

の数を増やすよう努力し、あらゆる人々に対し、平和のメッセージを届けていきたいと思
います。

本日何度も言及されていますが、オバマ大統領から賛同が得られることを願って、更に
有名なもう一人のアメリカ大統領、ドワイト・D・アイゼンハワーの言葉を引用しましょ
う。「この時代において、統制された全面軍縮は必須である。自分たちの子どもたちの長く
続く未来を一番の関心事とする何億もの人々の軍縮に対する要求が世界中に広がり、そし
て、その声が強まることによって、いつか、いかなる者も、いかなる国のいかなる政府も
逆らえないぐらいの大きな流れとなることを、私は願う。お互いに誇りと自信を持てる軍
縮が引き続き必要である」というものです。(拍手)

ロバート・ハーヴェイ (ワイタケレ市長・ニュージーランド) :

ありがとうございました。

次に、ハノーバーのステファン・ヴァイル市長、お願いいたします。

ステファン・ヴァイル (ハノーバー市長・ドイツ) :

皆様、私から、ドイツの平和市長会議がどのような活動をしているかということをご紹
介します。

田上市長、長崎で素晴らしいお迎えやおもてなしをいただき、ありがとうございます。
この町を満喫させていただいております。

「平和がすべてではないが、平和がなければ、すべてが無に等しい」という見識は、ド
イツの元首相であり、ノーベル平和賞受賞者であるヴィリー・ブランド氏の言葉です。

大衆が非常に重要で胸に迫る問題に関して声を上げ、都市がそうした市民の代表として
意見を主張すれば、国や政治に必ず影響を及ぼします。特にそれが軍縮と平和への取組の
根拠をなす将来の暮らしや生存という問題であれば、当然でしょう。

世界中に 3000 以上のメンバーを有する組織として、平和市長会議にますます注目が寄せ
られるようになっていきます。こうした注目の高まりが、2020 年までに核兵器のない世界を
実現することを目標とした全面的核廃絶を求めるわれわれの主張が、再び優先的議題とし
て浮上する一因となったのは間違いありません。

この数週間で加わった 10 の新しい加盟都市を含め、ドイツの 350 以上の加盟自治体も
これに貢献しました。

加盟都市の中でも、核の脅威が未だに存在し、近年、核軍縮も進んでないことに対する
懸念が高まっています。特にドイツの年配の人々は、自分自身の経験から、戦争、そして
破壊が何を意味するかということを知っています。例えばハノーバー市は、第二次世界大
戦で 90%が壊滅状態になったのです。彼らは、自分の子どもたちや孫たちに同じことを再
び体験してほしくないと願っています。ですから、彼らにとって、軍縮や平和への取組み
は、非常に個人的な身近な関心事なのです。

最近、広島と長崎の原爆犠牲者を追悼する特別慰霊式が、それぞれの原爆投下日にドイツの多くの都市で行われています。これは確実に平和市長会議による努力の成果です。

今年の国際平和デーに際し、ハノーバーをはじめ多くの都市が9月1日に特別な活動を計画しています。と言いますのも、この日は、第二次世界大戦開始の70周年を迎える日だからです。ドイツの歴史の中で、暗い暗い日々でありました。

こうした核兵器に関わる問題は、人々の心を占め、都市にも関わる問題です。市にとっても、人々にとっても問題は同じです。

われわれは、経済危機の影響を受けており、その影響は都市にも及んでいます。経済問題と雇用不安が多くの人にとって、最も大きな問題となっけてしまっています。大幅な税収不足により、予算にも影響が生じることになります。

それでもなお、戦争と平和の問題は政策課題に盛り込まねばなりません。経済危機は来ますが過ぎ去るのです。しかし、われわれが努力しなければ、核の脅威は決してなくなるものではありません。

これは、ドイツの加盟都市が、11月27日にハノーバーで行われる年次会議で注目している課題の一つです。9月末に連邦議会選挙が行われ、新政府発足のあと、ドイツでは、どのような焦点で軍縮問題を進めていくのかということが、議会と政府において話し合われることになっています。そして、来年5月のNPT再検討会議に関する目標設定についても情報が得られると考えています。

ドイツにおける平和市長会議では、更に活発化しているグローバルな平和活動の一翼を担いたいと考えています。

ありがとうございました。(拍手)

ロバート・ハーヴェイ (ワイタケレ市長・ニュージーランド) :

ありがとうございました。

次は、マラコフ市の事務総長ミシェル・シボ様です。

ミシェル・シボ (マラコフ市事務総長・フランス) :

マラコフ市は小さな町でパリ南西近郊にあります。特筆すべきことは、これまで7回の平和市長会議総会の全てに参加した役員または副会長都市であることです。(しかし、私の人生を語ることはせず)、今後の皆様の考察のために、いくつかの要素についてお話ししたいと思います。

今日、核兵器は、人間が創り出したものの中で最も危険なものであることは、はっきりしており、それは既に言われています。現在の近代化の中で、だんだんそれが危険になっていることは確認され、1968年から、NPTは核兵器廃絶を訴えてきました。

1984年、国連は「人民の平和への権利についての宣言」を採択していますが、これは「この権利の行使を保証するために、加盟国の政策は、戦争の脅威、特に核戦争の脅威の排除

を目指すものであることが不可欠である」と規定しています。

核兵器の廃絶は、既に国際的な場で計画されていますが、全ての人々が言うように、そのスピードが緩やかであることは確かです。

最近、オバマ大統領の発言により、国際社会において新しい道が開かれました。世界中の平和活動家に希望を与えたのです。われわれは、核兵器廃絶に勝利する力を取り戻さなければなりません。そのためには共に行動することが必要でしょう。

そこで、二つの道を提案したいと思います。まず、経済危機と核の過剰武装による浪費との関係を強調しなければなりません。そしてまた、持続可能な発展との関係も考えなければなりません。もちろん持続可能な発展についての議論は色々ありますが、その時、核兵器の問題がしばしば忘れられています。しかしながら、本当にこの地上で持続的な発展を考えるならば、核兵器を保存することはできません。それをはっきり喚起すべきだと思います。

気候変動の問題、環境の問題、化石エネルギーが減少しているといった問題は、地元の行政組織にとっても懸念事項です。しかし、必ずしもこのことと核兵器との関係が明らかになっている訳ではありません。ですから、われわれ、核軍縮のために戦っている都市が、そういったことを明らかにしていくべきだと思います。

平和市長会議の皆様、本日ご出席されていない市長の皆様に、持続的な発展と核兵器とは相容れないという問題を、都市での活動計画とアジェンダの中に組み入れるように呼びかけるべきだと思います。そして、日々、それを実行していただきたいと思います。

持続的な発展と核兵器との関係の延長線上において、われわれは、核兵器による全面的な破壊力と人間の行動との間の関係について考えることができます。われわれの世界は変化しており、ますます都市化しているからこそ、都市が標的になるこの問題が大事になってきているのです。われわれは都市を攻撃対象にしないように要求していますが、実際には標的になっています。都市には住民がいて、住民は、全面的破壊の脅威を前にして何もしない訳にはいきません。

われわれは、単純な提案を検討しなければなりません。それは、持続可能な開発と核軍縮とを結びつけることです。

ありがとうございました。(拍手)

ロバート・ハーヴェイ (ワイタケレ市長・ニュージーランド)

ありがとうございました。

それでは、北九州市の北橋健治市長にお願いいたします。

北橋健治 (北九州市長) :

100万の市民を代表して参加いたしました。市長が参加するのは24年ぶりのことです。まず、お礼を申し上げたいと思います。広島市の秋葉市長、長崎市の田上市長はじめ、世

界各地で核兵器のない平和な世界を実現するために活躍していらっしゃる皆様に心から敬意を表したいと思います。

北九州市は長崎から東へ 200 キロ離れた工業都市です。今から 64 年前の 8 月 9 日の朝、爆撃機は、長崎ではなく北九州市の上空に飛来しました。ところが、視界が悪く、原爆投下を諦め、長崎に投下されたというのが歴史的事実と聞いています。したがって、長崎、広島を悲しみを、北九州市民も同じように深く感ぜざるを得ません。

北九州市では、毎年 8 月 9 日、「原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」を行っています。原爆被害者の方が中心でしたが、年とともに高齢化し、戦争を体験していない人たちの中で原爆の悲惨さが風化していくことを心配し、北九州市原爆被害者の会の皆様との共催で、平和を祈る式典を行っているのです。また、市内の 5 カ所で、終戦の日に「戦没者追悼式」を行い、常時、戦時資料を展示し、次の世代も含めて、戦争の悲惨さを風化させないように努力しています。

今年の 4 月、「嘉代子桜」という活動を知りました。「嘉代子桜・親子桜」を植樹することで、核廃絶、平和の思いを全国に広げようとする運動に心打たれました。そこで、「嘉代子桜・親子桜を広める会」の協力を得て、今年、市民参加の植樹式を行いました。

原爆投下から 64 年経ち、戦争のことを直接知らない若い世代がますます増えています。大事なことは、若い世代も含めて、核廃絶・平和の活動の大切さを伝えていくことだと思っています。そういう思いを込めて、今回、参加しました。核廃絶の運動には国家の決断が不可欠だと思います。しかし、テーマにあるように、市民と都市が国を動かすことができるということを固く信じる一人です。都市と都市が国境を超えて連帯し、一つの理想に向かうとき、時代は必ず開けると信じております。

その意味で、2010 年を「ヒロシマ・ナガサキ議定書」採択の年にするという趣旨に心から賛同したいと思います。

私の母は広島市民でした。私は被爆者二世です。母は、私を産むときに産んでいいかどうか死ぬほど苦しんだと聞いています。「ノーモア ヒロシマ、ノーモア ナガサキ、ノーモア ヒバクシャ」を大事にして、この運動を続けていかねばならないと思います。

この素晴らしい大会での発言をお許しいただいたことに心から感謝申し上げ、スピーチに代えさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

ロバート・ハーヴェイ (ワイタケレ市長・ニュージーランド) :

ありがとうございました。

最初の女性のスピーカーは宝塚市の中川智子市長です。お願いいたします。

中川智子 (宝塚市長)

兵庫県宝塚市長の中川智子です。私は、この 4 月に市長になりました。市制 54 年で初めての女性市長ですが、一番初めの仕事は平和市長会議に加盟することでした。そして今日、

世界中から志を同じくする仲間の皆様にお会いできたことを、とても幸せに思っております。

私は、1996年から衆議院議員を7年間していましたが、その時に出会ったのが広島市の秋葉忠利市長でした。秋葉さんは、パキスタンで核実験があった時、夜中に「中川さん、今すぐ大使館に抗議に行こう」と電話をしてきました。秋葉さんは夜中でもすぐに抗議行動をしました。インドで核実験にあった時も、すぐにインド大使館に抗議に行こうと言われ、秋葉さんの姿は核廃絶のために戦う姿でした。私はその姿に打たれ、心から尊敬しながら、ずっと秋葉さんの活動を見て参りました。そして、市長になって、平和市長会議に加盟して、秋葉さんの思いの手伝いをしたいと思いました。

もう一つ、私は、在外被爆者のことを皆様にお伝えしたいと思います。在外被爆者は、日本の被爆者援護法の適用から長い間排除されてきました。しかし、次々と裁判が起き、その主張が認められ、ようやく居住国で被爆者援護法が適用されるようになりました。でも、まだ日本の被爆者と同様にはなっていません。一つには、医療費の支給額に年間約15万円の限度が設けられているからです。二つ目には、原爆症の認定申請をするために日本に来なければならないからです。高齢者が多く、しかも病気で来日できない方が、まだまだ海外にたくさんいらっしゃいます。在外被爆者が一日も早く、日本国内の被爆者と同等の援護を受けられるよう、この場で、皆様に訴えたいと思いますし、政府への働きかけも活発にしていきたいと思います。

無差別大量破壊兵器である原爆は、敵味方の区別もなく、一瞬にして多くの人の命を奪い、多大な被害を与えました。とりわけ当時、日本の植民地にされていた朝鮮半島出身者の多くの方が犠牲になりました。その数は約7万人で、全被爆者の1割以上と推定されています。また、被爆後、日本を離れて国外で暮らすようになった在外被爆者は、現在、韓国、北朝鮮、アメリカ、ブラジルなど世界四十数カ国に約5000人います。原爆資料館には、もっと充実した展示を望みたいという思いも被爆者にはあります。在外被爆者の問題もきちんと記憶して伝承するために、皆様のお力を借りたいと思います。

私は、8月6日に秋葉さんが平和宣言で仰った、次の世代への最低限の責任を果たすということは、この活動にかかっていると信じています。市長は、市民を守るために平和をきっちりと残していくことが最低限の仕事であるとも思っています。

今日は、発言の機会を与您いただき、とてもうれしく思っています。最後に宝塚市のPRをします。宝塚は、『火の鳥』を描いた手塚治虫が5歳から24歳まで暮らしていた町です。また、宝塚のレビューがあります。宝塚市のパンフレットを外に置いています。

私は、兵庫県でたくさんの仲間に、平和市長会議に入ってください、と頑張ってお誘いすることを皆様にお誓いして、アピールといたします。共に頑張っていきましょう。サンキュー ベリー マッチ。(拍手)

ロバート・ハーヴェイ (ワイタケレ市長・ニュージーランド) :

中川市長、ありがとうございました。

スザンナ・アゴスティーニ市議会議員も、広島の目的の大きい支持者で、フィレンツェ市からお越しになっています。

スザンナ・アゴスティーニ（フィレンツェ市市議会議員・イタリア）：

市長の皆様、関係団体の皆様、平和の推進者である皆様にご挨拶を申し上げます。特に平和市長会議の会長、副会長である広島市長、長崎市長、そして長崎の皆様にご挨拶を申し上げます。

1987年、フィレンツェのアーティストであるヨーリオ・ヴィヴァレッリから長崎市に、“Hymn to Life”（人生への賛歌）と題する記念碑が寄贈されました。これには「原爆の恐怖を決して忘れない」というメッセージが込められています。

本日、私がお場にいますのは、平和推進におけるフィレンツェ市の国際的な取り組みを確認するためです。この取り組みは1950年代までさかのぼり、当時のフィレンツェ市長、ジョルジョ・ラ・ピラが、世界中の市長に対して、平和に対する彼の政治ビジョンを提唱しました。それは、組織と市民のニーズを橋渡しする存在としての市長の役割を強調するものでした。

私は、この数年、絶え間なく素晴らしい活動をなさった平和市長会議の会長である秋葉広島市長にお礼を申し上げたいと思います。2008年、ジュネーブでのNPT再検討会議第2回準備委員会の席でお会いした時に、秋葉市長は、ラ・ピラ市長のことを「予言者」だと仰いました。実際、54年前、ラ・ピラ市長が、同じジュネーブでの赤十字国際委員会でスピーチを行い、次のように提唱しています。「都市は、現代社会で不可欠の役割を果たす生活ユニットである。国家には都市を破壊する権利はない。都市はその政治的・歴史的・宗教的価値故に存在する権利があり、国家はこうした価値を認識しなければならない」。

ジュネーブの会合で、各国の首都の市長が集まる国際会議の開催が決定し、1955年10月にフィレンツェ市で実際に開催されました。それは広島・長崎の悲劇から10年後に当たり、世界は冷戦のために二分されていました。フィレンツェの由緒ある市庁舎、ヴェッキオ宮殿が首都の市長会議の舞台となり、ワシントンDC、モスクワ、ロンドン、パリ、プラハ、ブカレスト、ワルシャワ、ピエンチャン、エルサレム、テヘラン、北京など、世界のあらゆる地域から市長が集いました。こうした都市は、国境や「鉄のカーテン」を越え、「同じ人類」という名の下に団結しました。

ラ・ピラ市長は、次のようなスピーチで会議を始めました。「都市とは本のようなものだ。すなわち、都市は人類の歴史と文化について語ってくれる。都市は次世代の精神的及び実際の教育に役立つ。何ものも都市を抹殺することはできない。都市は、現在の世代により保護され、発展し、そして次世代に引き継がれていくべきものである」。

今日、核の脅威が高まり、大量破壊兵器を保有する国が増える中で、われわれは、「人類の力」という名の下に、組織と市民との間の絆を再構築する必要があります。この「人類

の力」というコンセプトは、兵器使用制限に関する第 2 回ハーグ平和会議でフェオドル・ド・マルテンスが提唱しました。マルテンスは、紛争の平和解決を目指す新しい政策や大量破壊兵器、核兵器の保有拒絶に向かって政府を動かす力について語りました。

この目的を達成するためには、人権意識を高める必要があります。今、世界は、テロリズム、戦争、金融危機、貧困の増大、大規模な新たな移民問題などに直面しています。こうした問題が核の脅威から人々の注意を逸らしがちになっています。それこそ、われわれが今日ここに集まっている理由なのです。われわれは、世論が核の危険に常に目を向けるように取り組み続ける必要があります。

フィレンツェの新しい市長は、核の脅威からフィレンツェ市を守る意思を明白にしています。また、学校における平和文化の推進を推奨し、人類の未来に対するリスクについての情報を新しい世代に提供しています。また、核工場の建設も禁止しています。

フィレンツェは、2005 年以來、こうした目標を達成するための努力をしてきました。2005 年には、レオナルド・ドメニチ市長が平和市長会議の理事会のメンバーに選出され、それ以來、ドメニチ市長はフィレンツェ市長としてイタリア市長会議（ANCI）の会長を兼務することにより、イタリアの数多くの市長を説得して、平和市長会議に参加させることに成功しています。

また、国際平和ビューローがイラクのクルディスタンに対して組織した国際ミッションの実施に際して、ドメニチ市長は、長年に亘って戦争の被害を受けているイラクの同地域の数多くの市長にとって、模範的な存在になっています。このミッションでイタリア代表団を率いたのは、平和市長会議の加盟都市で、第二次世界大戦中に虐殺が行われたことで有名なマルザボットの市長でした。ハラブジャ市の姉妹都市でもあり、ハラブジャ市長のキダー・カリーム氏が平和市長会議の理事に任命されたことを知って、われわれは感動しました。ハラブジャは、現在、そして将来の世代にとって、時として取り返しのつかない深刻な被害を生み出す化学兵器の使用によって大きな打撃を受けた地域だからです。

それから、イラクのジャラル・タラバニ大統領夫人のヘロ・イブラヒム・アーメドさんがフィレンツェに来訪されたこともご報告したいと思います。それは、遺棄された子どもたちの遠隔地への養子縁組推進を目的としてクルディスタンに設けられた協会、“Save the Children”（子どもたちを救おう）を通して活動を行い、児童保護の分野で業績をあげたことに対して、フィレンツェの「平和賞」を受賞するために来られたのです。

これらは、都市と戦時体制にある国との連帯、積極的な協力を示す一例です。

また、われわれは、クルディスタンで、イタリアの衛生技術とイタリア人スタッフを備えた病院を 3 カ所建設して、保健援助プロジェクトを開始しています。これらの病院は、成人と子どもの両方を援助するもので、患者が治療のために国外へ移送される必要がなくなりました。

フィレンツェ市が平和の文化を積極的に推進したもう一つの活動は、2005 年にノーベル平和賞を受賞したエルバラダイ博士へ名誉市民権を授与したことです。エルバラダイ博士

は、核兵器拡散に抵抗する国連の国際原子力機関（IAEA）の事務局長です。IAEAは、博士の任期中に、特に第三世界諸国が核武装に走ることを回避するために、核兵器に関連するリスクについて知識を育み、核査察の受入を広め、安全保障の果たす役割を高めました。

フィレンツェ市は、2007年11月、1955年の時と同じく、平和市長会議理事会を開催し、世界における平和推進の中心となったのですが、理事会終了時に、100名を上回るイタリアの市長と数名の海外都市の市長が市庁舎に会して、2020ビジョンキャンペーンに本腰を入れて取り組むこと、平和市長会議の活動を支持することを明らかにしました。3日間の会期中に、平和市長会議に加盟している122カ国の1828の都市を代表して、日本、イラク、アメリカ、ドイツ、イギリス、フランス、ベルギー、イタリアから市長たちが集まりました。共通の目標として掲げられたのは、広島と長崎の原爆投下から75周年に当たる2020年までに、一切の核兵器を廃絶することでした。

もう一つ重要な国際会議は、2008年4月にジュネーブで開かれた会議でした。NPT再検討会議の第2回準備委員会が開かれる機会に、われわれは理事会を開催し、平和市長会議と2020ビジョンキャンペーンに参加する都市メンバーの数を拡大することを決定しました。この決定に基づき、フィレンツェ市長は、イタリアの190都市の市長に個人的書簡を送り、このキャンペーンへの参加を正式に要請しました。

現実の世界では、事態が前向きに進んでいる喜ばしい兆候があります。アメリカのオバマ大統領は、2009年4月にプラハで行った演説で、核兵器のない世界を目標に掲げ、核軍縮に関する努力をする意向を明らかにしました。また、2009年6月5日、欧州議会は、核兵器を禁止する世界条約を定める必要性があることを表明し、核兵器保有国に対して、欧州全域をカバーする非核地帯を設ける軍縮計画を提案するよう要請しました。イタリア国会は、2010年に行われるNPT再検討会議中に、核兵器廃絶の分野における欧州議会のこの決定を積極的に推進することをイタリア政府に義務づける法律を承認しました。

われわれは、だからこそ常に平和市長会議のメンバーを増やすことが必要なのです。

最後に、平和の推進と人権尊重の分野におけるフィレンツェの活動として掲げておきたいのは、フィレンツェのマッテオ・レンツィ新市長が、ノーベル平和賞を受賞したシリル・エバディさんと会見したことです。エバディさんは、人権を認めるために戦っている全てのイラン人のシンボルとなっている弁護士です。

私は、この会議でフィレンツェの新市長の代理を務めることを誇りに思っていますが、レンツィ市長は、特に姉妹都市と協力して、平和の文化とあらゆる大量破壊兵器禁止の教育を通じて、国際協力の分野における活動の数を増やすことを望んでいます。そして、フィレンツェ市に暮らすイタリア人と外国人双方の学生との協力も行っています。

私の責務は、フィレンツェ市平和委員会の会長として、フィレンツェ市長の代理人として、皆様すべてとの絆を維持・強化し、NGOや平和活動家の皆様と協力することです。協力することではじめて、われわれは、安全で兵器のない世界を発展させるという取組みを成功裡に導くことができるのです。“Yes, we can.”です。（拍手）

ロバート・ハーヴェイ（ワイタケレ市長・ニュージーランド）：

ありがとうございました。フィレンツェが貢献してきた長い歴史と数十年前に素晴らしい彫刻を寄贈されたことに敬意を表したいと思います。われわれの敬意をレンツィ市長に是非お届け下さい。

クルディスタンに対するフィレンツェの貢献についてお話しになりましたが、次のスピーカーはクルディスタンからいらっしゃったキダー・カリーム・ハラブジャ市長です。

キダー・カリーム（ハラブジャ市長・イラク）：

まずは、皆様にお礼申し上げたいと思います。この重要な会議をアレンジして下さいありがとうございます。皆様にお目にかかり、私の都市、ハラブジャで起こったことについて、是非お話ししたいと思います。

イラクでのジェノサイド（大虐殺）、クルド人に対する大量破壊兵器の使用についてお話ししたいと思います。1921年、イラクが国家として発足し、2003年にサダム・フセイン政権が終止符を打つまで、イラクの政策は、クルド民族を消し去ることでした。それに対してクルド人は何とか頑張ってきましたけれども、イラクでバース党が政権について、サダム・フセインが大統領になってから、イラク、とくにクルド地域は非常に苦しむことになりました。当時のイラク政権は、クルド人に対して大量破壊兵器を実験として使ったのです。1974年にイラクの軍隊は、ハラブジャ市とカラジャ（Qaladzya）市でナパーム弾を落とし、80年代には、200以上のクルドの村に対して化学兵器が使われました。

1988年3月16日、ハラブジャは大きな攻撃を受けました。マスタードガス、シアン化合物、神経ガスなど多種多様な化学兵器が使われ、5000人以上の市民が殺され、1万人以上が傷ついたり、イランへ逃げたりしました。21年経ち、ハラブジャは回復しつつありますけれども、まだ人々は化学兵器の影響に苦しんでいます。

しかし、われわれは、報復、憎悪の気持ちを持っていません。われわれは、過去と和解する努力をしています。そして、将来を形作っていかうと思っているのです。もっと大事なことは、われわれは、このような残虐行為を再び繰り返してもらいたくないと思っています。イラクでは、全ての宗教、全ての民族に平和に暮らしてもらいたいと思っています。

平和市長会議は、これからも頑張っていたきたいと思います。一つの目的のために様々な民族の市長が参集する議会のような役割を果たすのではないかと思います。（拍手）

ロバート・ハーヴェイ（ワイタケレ市長・ニュージーランド）：

ありがとうございました。とても感銘を受けました。

次に、イギリスのダンディから、英国・アイルランド非核自治体協会のジョージ・レーガン会長をお迎えしたいと思います。

ジョージ・レーガン（英国・アイルランド非核自治体協議会会長・イギリス）

秋葉市長、田上市長、心より感謝申し上げます。平和市長会議で広島と長崎を訪問させていただき、本当に思い出深い記憶を刻むことができました。ご参会の皆様、私は、平和市長会議の役員都市、マンチェスター市を本拠地にする、英国・アイルランド非核自治体協議会会長のジョージ・レーガンです。日本の皆様に、われわれの運動に携わる全ての都市と市民からのご挨拶を申し上げます。われわれは、イギリス諸島で核軍縮と核廃絶を目指す活動を実行しています。

われわれの活動は、米ソの冷戦が一番酷かった1980年から始められています。イギリスは同盟国として、英国内の米軍基地における核兵器の保有を許可してきたのです。グリーンナムコモン基地もその中に含まれていましたが、地域の議員たちは、核攻撃の標的になってはいけなと考え、それに対して反対の意を表明しました。

1980年11月5日、マンチェスターの市議会は、自らを非核自治体として宣言しました。その後数か月のうちに、イングランド、スコットランド、ウェールズの各自治体もその運動に参画し、ロンドン、グラスゴー、エジンバラ、カーディフ、リーズ、そして、私の故郷、ダンディも参加しました。

非核自治体の宣言を決めることは高度に政治的なことであり、普通は、これまで国際的な政治に関わっていなかった自治体が行うことではありません。それにしても、“nuclear free”になるというのは、少々気になるコンセプトです。原子力発電所があり、核物質が移送されているかもしれないのに、どのようにして核のない都市になるのでしょうか。

それでも「核がないこと」は、われわれの希求するところであり、この運動に参加する全ての都市が、その理念に基づいて活動していました。1986年のチェルノブイリの事故以来活動の範囲を広げ、原子力発電所の安全性への懸念も扱うようになりました。30年の間、われわれ非核自治体協議会は、核兵器と原子力の問題に関して、常に懸念を表明し、それは自治体全体の大きな声となりました。

そして、われわれは成功したのです。もうグリーンナムコモンには米国の核兵器はなく、今は公園とビジネスセンターになっています。1980年代後半に、最後の大々的な核兵器削減が米ソによって行われたからです。私は、市民グループ、世論、そして市議会が非常に重要な意思決定を果たしたと思います。市、そして市民が行ったキャンペーンが各国政府を動かしたのです。

私は、2003年にマンチェスターで秋葉市長と伊藤市長（前長崎市長）がお話になったことを覚えています。イギリスで非核自治体をつくる動きがあることに鼓舞されて平和市長会議ができ、また、日本の非核自治体も更に発展したということでした。

非核自治体協議会は、今や北アイルランド、そしてアイルランド共和国でも、市町村の加盟を拡大しています。イギリスと違い、アイルランド共和国は、既に中立を表明し、非核国家としての宣言をしています。このことはわれわれの活動を強化するものであり、われわれは、アイルランド政府との強いつながりを発展させてきました。

地元の政治家として地元のコミュニティのことを最も知っているわれわれが活動を強め、それによって、全国的にも、また国際的にも各国政府に対して働きかけることが大事だと考えます。そして、平和市長会議を通して、また他の市民グループとともに、われわれの切なる気持ちを届け、2020年までに核廃絶を実行したいと考えています。

さて、非核自治体協会が発足した1980年当時、9年後に冷戦が終わるとは思っておりませんでしたし、ソ連がなくなるとは思っておりませんでした。同じように核兵器廃絶をすることができるとは思っていませんでした。1980年代のように、われわれは核兵器廃絶を最終的に完了するために、更なる力を結集しなければなりません。

5月、NPT再検討会議準備委員会開催時の国連での平和市長会議のセッションで話すことができました。私は、平和市長会議が世界の多くの国連大使から敬意を表されていることに感銘を受けました。われわれはヨーロッパ、アジア、南アメリカ、アフリカの大使と話し合いましたが、われわれの希求するところが強く支持されたことで、2010年には更なる現状打破が見られると思います。

秋葉市長が言われたように、われわれは「オバマジョリティー」です。われわれは夢にも思っていなかったのに、アメリカに黒人の大統領が実現したように、いつか、間もなく、確かに核兵器の削減が実現するであろうと考えます。それこそが孫の世代に良いものとして残せるものです。共に頑張りましょう。私の市を代表し、この非核活動を行うことができ、本当にうれしく思っています。

私が初めて広島と長崎を訪れたのは、4年前の広島における総会の時でした。そして、被爆者の皆様の気持ちを知ることができました。今でも原爆の恐ろしさが心に残っています。

英国の古い格言に、「人の悪行は死後も生き永らえるが、善行はしばしば骨とともに葬り去られてしまう」と言いますが、2020年までに核廃絶を実現するために、われわれ全員が全力を尽くし、いかなる善行も葬らせることなく永続させましょう。ありがとうございます。（拍手）

ロバート・ハーヴェイ（ワイタケレ市長・ニュージーランド）：

ありがとうございました。

まだ半分ぐらいしか済んでいませんが、時間がなくなってきました。8人の方々から、熱意ある素晴らしい言葉を聴きました。各市長は、われわれの活動についてお話し下さいました。他の皆様のお話は明後日の全体会議Ⅱの中で伺いたいと思います。もっと色々な情報を明後日聴くことができるということです。

皆様に感謝申し上げます。秋葉市長、田上市長、われわれをここに結集させてくださいましたことに対して感謝申し上げます。二人の市長に対して、是非拍手をお願いいたします。（拍手）

本日午後の全体会議は、これもちまして終了いたします。では、明日、お会いしまし

よう。

司会：本日、ご発言いただけなかった皆様につきましては、明後日の全体会議Ⅱでご発言
いただくように考えております。よろしく願いいたします。

ロバート・ハーヴェイ市長、たいへんありがとうございました。(拍手)